エディット・シュタインの手紙公開をめぐる反響

―― ウィリアム・ドイノの解釈 ――

木　鎌　耕一郎

解　説

本稿の目的は，*Inside the Vatican* 誌（2003年3月号）に掲載されたウィリアム・ドイノによる論考を，解説を付したうえで試訳をもって紹介することである。この論考は，2003年2月に教皇庁がエディット・シュタインの手紙を公開したことを受けて，それに対するジャーナリズムの反響を批判的に検討し，公開文書に解釈を施したものである。

Inside the Vatican 誌は合衆国で発行されているカトリック系の雑誌であるが，神学誌ではなく，バチカンの最新の動向を伝える大衆向け雑誌である。エディット・シュタインの手紙について伝えたこの号の全体的な論調は，ナチスが台頭した時代のバチカンの対応に批判的な一部の世論から教皇の立場を擁護するものであり，ウィリアム・ドイノの主眼も同様である。

本稿で彼の論考を紹介する理由は，すでに別稿[1]で論じた本論争の具体的展開の過程で，この論考が取り上げられたからである。ウィリアム・ドイノの主張に対して，家族の一員として，またユダヤ教徒の立場から鋭い批判を浴びせたのは，エディット・シュタインの姪にあたるスザンヌ・バッツドルフであった。別項では主にスザンヌ・バッツドルフの主張を取り上げたが，本稿では彼女が批判したウィリアム・ドイノの主張を紹介する。解説として，この手紙をめぐる問題の概略を以下に示しておこう。

2003年2月，それまで未公開であったエディット・シュタインの手紙を教皇庁が公開したことから，カトリックとユダヤ教の論者の間で新たな論争が展開された。「新しい」とはいえ，この手紙をめぐる問題はすでに長い間指摘され続けてきたことであった。すなわち，エディット・シュタインが記したこの手紙については，公開前からその存在は知られていた。これは，1933年春にエディット・シュタインが，時の教皇ピオ十一世（在位1922～1939年）に宛てて送った手紙である。

『わたしはどのようにしてケルンのカルメル会に入会したか』[2] の記述には，手紙の内容が，ドイツ国内におけるユダヤ人迫害の惨状を教皇に報告し，ユダヤ人問題の解決のために回勅の公布を嘆願するものであったことが示されている。当初エディット・シュタインは，教皇ピオ十一世と謁見し回勅の交付してもらうよう直に嘆願しようと考えていたが，指導司祭の勧めに

八戸大学ビジネス学部

[1] 拙稿「エディット・シュタインの手紙をめぐる論争の射程」『八戸大学紀要第36号』2008年3月（59-79頁）

[2] 『わたしはどのようにしてケルンのカルメル会に入会したか』は，コンラッド・ド・メーテル，エディット・シュタイン／福岡カルメル会・西宮カルメル会訳『エディット・シュタイン 小伝と手記』女子パウロ会 1999年の90-124頁に，西宮カルメル会訳で収められている。また最近になって，エディット・シュタイン研究者の須沢かおり氏が「私がケルンのカルメル会に入ったいきさつ」と題して，『キリスト教文化研究所年報30号』ノートルダム清心女子大学キリスト教文化研究所 2008年3月（129-151頁）に新しい翻訳を掲載している。本稿の引用部は，須沢氏の訳を用いた。

従い，手紙という形で彼女の願いは教皇に届けられた。

エディット・シュタインは，1928年以来，毎年，ボイロンにあるベネディクト修道院で聖週間と復活祭を過ごしており，1933年の春もボイロンを訪れたが，この年の訪問で彼女は，指導司祭であるベネディクト修道会のヴァルツァー大修道院長に，教皇への嘆願という思いつきについて相談し，指示を仰ごうとした。ヴァルツァー大修道院長は，その年が聖年にあたり，ローマに巡礼者が多数訪れるため，私的謁見が困難であると判断したため，エディット・シュタインは方法を変え，自らの思いを教皇に嘆願する「手紙」を記し，大修道院長を介して教皇へ送付した。ドイツでヒトラーが首相に就任したのが1933年1月30日であるから，この手紙は，ドイツ国内で急激に推し進められたユダヤ人迫害を時期的にいち早く教皇に伝えたことになる。

後に論争の火種となったのは，この手紙に対する教皇からの具体的な回答がなかった点であった。『わたしはどのようにしてケルンのカルメル会に入会したか』には，手紙の反応について次のように記されている。

> ローマで教皇に私的謁見を願い出る件について修道院長に相談してみましたところ，非常に大勢の人々が謁見を願い出ているため，私的謁見は無理であるとのお答えでした。もし許されたとしても，小人数のグループで教皇に謁見するであろう，とのことでした。しかしそれでは私の目的が果たせないため，ローマへ行くことは断念し，その代わりに教皇に直々の書簡を託することにしました。私の手紙は開封されないまま，教皇に届けられたとのことでした。しばらしくしてから，私は私自身と家族への教皇からの祝福の手紙を受け取りました。それ以外のことは何も起こりませんでした。私の手紙に記されていたことが教皇の脳裏を横切ったことはあったのだろうか，と後年になってしばしば考えたものです。なぜなら，何年かのちになって，私がドイツのカトリック教徒に起こるであろうと予期したことが刻々と現実のものとなっていったからです。[3]

この箇所でエディット・シュタインは，祝福の手紙を受け取った以外に何も起こらなかったと記しているが，この手紙の存在と1937年にピオ十一世が公布した *Mit Brennender Sorge*（燃えるような憂慮を持って）という回勅とのつながりに関する解釈の異なりが論争を引き起こしているといってよい。

この回勅は，1933年にバチカンとドイツが締結した政教条約をしばしばドイツが違反したことを強く非難するために公布された，とカトリック教会では理解されている。しかし反対に，戦後のユダヤ人社会からは，*Mit Brennender Sorge* の公布時期の遅さや有効性に対する疑問から，時の教皇庁がナチスの蛮行に有効な政治的手段を講じなかったという，いわゆる「教会の沈黙」に対する非難が繰り返されている[4]。エディット・シュタインの手紙の存在は，時間的にも目的の点からもこの「教会の沈黙」とのつがなりのもとに理解される傾向にある。すなわ

[3] 前掲，須沢かおり訳（132-133頁）

[4] スザンヌ・バッツドルフもまた，同回勅との関わりを次のように否定している。「エディット・シュタインの手紙であろうと，他の誰か，より著名な人物の議論であろうと，反ユダヤ主義を非難する回勅を発布するように教皇ピオ十一世を駆りたてることはなかったであろう。しばしば言われることであるが，1937年に公にされた彼の回勅 *Mit Brennender Sorge* は，エディット・シュタインの嘆願への回答であったという。しかしながら，この文書は，彼女が手紙を書いてから四年経つまで発布されず，ユダヤ人についての言及もないのである。Susanne M. Batzdorff, “A Martyr of Auschwitz”, *EDTH STEIN Selected Writings With Comments, Reminiscences and Translations of her Prayers and Poems by her niece,* Templegate Publishers, 1990, pp. 110-111（1987年4月12日に *New York Times Magazine* 誌に掲載された記事の再録）

ち，この手紙は，「教会の沈黙」を非難する立場からは「聞き入れられなかった嘆願」として理解され，当時の教会の姿勢を擁護する立場からは「回勅 *Mit brennnender Sorge* の公布を促した嘆願」として理解されるのである。

本稿で紹介するウィリアム・ドイノの論考は，エディット・シュタインの手紙が，戦時中の「教会の沈黙」批判を繰り返すユダヤ人社会や一般ジャーナリズムの解釈を批判的に検討し，エディット・シュタインの手紙以前にすでに教皇庁がナチスの蛮行に対して行動にうつっていたことを論証しようと試みたものである。

ウィリアム・ドイノの主張の独自性は，エディット・シュタインの手紙に付されたヴァルツァー大修道院長の添え書きと，それに対するパチェリ枢機卿の返信の文面を見つけだしてこれを分析していることにあると考えられる。解釈の当否は別にして，これは従来にない視点であり，手紙の公開によって議論の幅が広がり，具体性を伴ってきたことが知られる。

注意しなければならないのは，ウィリアム・ドイノの主張はカトリック教会を代表するものではなく，彼はこの論考によって本論争の一当事者になったにすぎないということである。私見では，パチェリ枢機卿が教皇大使オルセニゴに宛てた手紙を根拠に，ナチス批判とユダヤ人援助の「行動に出ていた」ことを導き出そうとする彼の解釈は，いささか強引なものに思われる。とはいえ，この論考を読む者は，エディット・シュタインの手紙をめぐる論争にとって決定的ともいえる核心的文書が公開されたにもかかわらず，当面この問題に関心を抱く人々による多様な解釈の噴出には終止符が打たれそうにないことを印象づけられるであろう。

ウィリアム・ドイノの論考は，*Inside The Vatican* 誌の「調査資料／バチカン公文書館」という欄に掲載されている。「2003 年 2 月 15 日，バチカン公文書は，ドイツの知識人エディット・シュタイン博士が教皇ピオ十一世に宛てた手紙を公開した。ITV (*Inside The Vatican*) 誌では，その公式な手紙をここに示し，その内容がどのように曲解され利用されているかを報告する。」という編集者の前置きが付されている。

以下に試訳を紹介する[5]。

＊　＊　＊

エディット・シュタインの手紙

ウィリアム・ドイノ

エディット・シュタインは長きにわたり，不必要な論争と誤った言及の源であった。論争や誤解のなかで人々は，福音を述べ伝えローマカトリック教会への改宗を促進することに気おくれした。著名なカトリック知識人であり，ユダヤ教から改宗して修道女となった彼女は，ナチスの仕業で亡くなり，ヨハネ・パウロ二世により列聖された。シュタイン —— 教会では十字架のテレジア・ベネディクタ修道女として知られている —— は，現代における最も偉大な女性の一人である。彼女は殉教者で，聖人でもある。

多くの人がシュタインのことを，露骨に「侮辱」することはないにしても，あいまいな公会議前の思考の例として都合よく利用している。すなわち，一方では，「預言者」と見るが，他方では —— ただ単に教皇権の名誉を汚すべくシュタインが利用可能であるために —— 1933 年に彼女が教皇の回勅を発布してもらうよう嘆願を申し入れ，教会がそれに応えなかった不手際に注目する。おそらく，元司祭で『コンスタンティヌスの剣』(2001 年) の著者であるジェイ

[5] William Doino, “Edith Stein’s letter,” *Inside the Vatican*, March 2003, pp. 22–27. この記事には公開されたエディット・シュタインの手紙の写真と英訳が掲載されており，編集スタッフが「教会の抵抗の歴史 (A Histry of the Church’s Resistance)」(pp. 28–29)「パッチェリはナチスを非難した (Pacelli Denounces the Nazis)」(pp. 30–31) という解説記事を載せている。公開された手紙の邦訳は，拙稿「エディット・シュタインがピオ十一世に宛てた手紙」『八戸大学紀要』第 28 号 2004 年 3 月ですでに紹介しているため省略し，本稿ではウィリアム・ドイノの論考部分のみの紹介にとどめたい。

ムス・キャロル[6]は，シュタインを利用したり誤用したりする者たちの代表格である（彼の論文「聖者とホロコースト」*The New Yorker* 誌1999年6月7日，52-57頁を参照）。彼は彼女を批判したり褒め称えたりを交互に繰り返し，自著で次のように断言している。「彼女は，後に自身が記しているように，1933年の復活祭前に，ナチスの反セム主義を非難する回勅を嘆願するために，教皇ピオ十一世に私的謁見を望んでいた。」（『コンスタンティヌスの剣』540頁）

2月15日に新しく公布されたバチカン文書の中に，彼女がピオ十一世に宛てた重要な手紙（後掲）と関連する通信文が公開された。しかし，ほとんど皆が，その公開に何かよからぬ懸念を感じ，また真実に手が加えられ省略されていると受け取った。彼女の死後ずっとゆがんだ仕方で説明されてきたその手紙は，このたびの公開により，予想したとおり，またもや誤って伝えられることになった。安の定，AP通信（米国連合通信社）が，2月19日水曜日発表のニュースでいちはやく取り上げ，世界中に報じた。シュタインの手紙が，「イタリアの新聞 *Crroere della Sera* 紙で水曜日（同日）にはじめて報じた」と伝えている。これが，第一の間違いであった。その手紙は，実際には前日，すなわち2月18日の火曜日に，ドイツの新聞 *Die Welt* 紙において，手紙の情報を最初につかんだ同国のジャーナリスト，ポール・パデによって公にされたのである。

AP通信は，Die Welt紙で報じられたオリジナルのドイツ語版よりも *Crroere della Sera* 紙に載った手紙の二次的なイタリア語訳を信頼し，「1933年4月12日，彼女は時の教皇ピオ十一世に，ナチスによる『ユダヤ人の血を殲滅する戦い』に反対する声明をだしてもらうよう願い，手紙を書いた」と誤って報じ続けたのである。第二の間違いは，シュタインの手紙に日付が記されていないこと，そして「ユダヤ人の血を殲滅する戦い」という言い回し（これはオリジナルのドイツ語からすれば「ユダヤ人の血の破壊への努力」の方が適切である）が直接的にはナチスによるユダヤ人商店のボイコット（1933年4月1日）の対応のひとつであり，何年後かに現実的に物理的にユダヤ人を絶滅する「最終的解決」政策と混同されるべきではないという点である。

さらに，手紙はピオ十一世に直接送られたのではなく，まずボイロンの修道院のラファエル・ヴァルツァー大修道院長に託され，シュタインからの嘆願は彼がバチカンへ転送したのである。大修道院長は，忠実に，ラテン語で書かれたカバーレターを同封して，これを行った。そしてその手紙の日付が4月12日（シュタインの

[6] ジェイムス・キャロルの肩書は，文中の著書（James Carroll, *Constantine's Sword : The Church and the Jews : A History*. Houghton Mifflin Company, 2001）によれば元カトリック司祭の神学者・歴史家・作家である。この本の第7章（53）"Edith Stein and Catholic Memory." pp. 536-543 でエディット・シュタイン問題に触れている。文中の *The New Yorker* 誌の記事のタイトルは，"The Saint and the Holocaust ; In canonizing Edith Stein, has the church misrepresented her life, and history ?" である。これらの著作と記事は手紙公開前のものであり，手紙をめぐる論争にはほとんど触れられておらず，「列聖」批判に終始している。*The New Yorker* 誌の記事は，当時広く話題になった。記事のなかジェイムス・キャロルは，エディット・シュタインの人物像と彼女の列福から列聖までの一連の出来事を振り返りながら，カトリック教会の対応に対する次の三点に批判的な見解を示している。① 単にユダヤ人であるという理由で殺されたはずのエディット・シュタインをカトリックの殉教者と見なすことは，「ホロコーストをキリスト教化する —— ユダヤ人だけでなく教会の身の上にも起こったこととしてホロコーストを位置づける —— という教会の企て」であること。②『われわれは忘れない —— ショアーについての反省』という教皇庁文書は，ピオ十二世の罪を否定するだけでなくその英雄的行為を断言しており，「必然的に史実の不正操作という疑念を引き起こしている」こと。③ 米国で少女の治癒をエディット・シュタインによる奇跡として認定した教会の意図は「ホロコースト時代のユダヤ教とカトリックの受難を同一視したいという衝動」と連動しており，科学者による奇跡認定の手続き方法は，「科学と宗教の両方を堕落させ…エディット・シュタインの人生の真の価値をも破壊」すること，である。

手紙は，それよりも少し前に書かれたと推定できる）であった。

大修道院長のカバーレターは，概略，次のように書かれている。「嘆願者（エディット・シュタイン）は最も急を要する問題として，私に依頼をしました。同封の手紙は，教皇様（ピオ十一世）に転送するように彼女が封印して私に渡したものです。嘆願者は，ドイツのカトリック界ではどこでも，著名な信仰と価値観の女性として知られています。彼女は，数々の作品を著し，それらは何版も重ねています。私はこのよき機会に，最も謙虚な方法で，高貴なる教皇様にお願い申し上げたいと思います。この最も不幸な時代に，私たちをお助け下さいますように。というのも，私の判断では，分別があり思慮深い人々の干渉がなければ，国中で，したがってドイツにおける母なる教会でも，最も酷い危険が続くことになるに違いありません。現在の危機は，特別に恐ろしいものです。多くの人々が言葉と不誠実な要求よって欺かれているのです。ここ地球上で私の唯一の希望は，聖座です。我々は神の助けを祈り，強く語り，静かに神に呼びかけることやめないでしょう。私は最も謙虚な仕方で祝福をお願い申し上げます。そして高位にひれふします。あなた様の取るに足らない僕，ラファエル大修道院長。」

この手紙は，注目に値する。というのも，ドイツの主要なカトリックのリーダーである大修道院長が，ナチスの民族主義と反セム主義について，エディット・シュタインと同様に気にかけていることをこの手紙は証明しているからである。

このようにユダヤ人の改宗者であるシュタインは，反セム主義の異端に自然と神経質になっていたが，孤独に立ちすくんでいたわけではなかった。背教者や協力者たちはまったく別にして，当時の主要なカトリックのリーダーたちは，今日彼らについてどのように言及されていようとも，国家社会主義の諸悪について十分に承知しており，強く反発していたのである。

一週間のうちに，大修道院長は暖かく手を差し伸べる返事を，国務長官であるエウジェニオ・パチェリ枢機卿（1939年にピオ十一世の後継者となった次の教皇ピオ十二世）から受け取った。

1933年4月20日の日付があるその手紙は，ドイツ語で次のように記されている。「4月12日に賜りました大司教様のお優しい手紙と同封の文書（エディット・シュタインの手紙）を確かに受け取りました。まことにありがとうございました。彼女の手紙が確実に教皇様（教皇ピオ十一世）のもとに届けられたことを，あなた様から適切な方法で差出人にお知らせしていただきたいと思います。私はあなた様とともに，この困難な時代に，神が特別な方法で聖なる教会を守り，教会のすべての子どもたちに堅い恵みと寛大な心 —— これらが私たちの最終的な勝利を予示するものです —— を与えてくださいますように，神にお祈り申し上げます。私の特別の敬意を表明しつつ，この上ない第一級の親しみを込めて，大司教様におゆだねします。エウジェニオ・パチェリ。」

言うまでもなく，AP通信は大修道院長のカバーレターとパチェリの素早い援助的な返信 —— とりわけ「私たちの最終的な勝利」に関する最後のくだり —— について言及しそこなっている。そこには，教会がナチスに対して抗議を進めていること，そして最終的には勝利するという予言について，明確に言及されている。これらのことをAP通信が知らなかったことは，疑う余地がない。しかし，この無知はまったく言い訳が立たない。というのも，シュタインの手紙は，当時，特別教会問題省（Congregazione degli Affari Ecclesiastici Affairs）[7] が秘かに記した文書とともに公開されたからである。しかも手紙のやりとり —— シュタインの日付のない手紙，4月12日付のヴァルツァーのカバー

[7] “Congregazione” は教皇庁組織上の「省」を示す。現在のバチカン組織図にこの省はない。

レター，そして4月20日付のパチェリの返信の手紙が，そっくりそのまま含まれていた。AP通信は，関連するすべての文書とともにニュースを配信したバチカンの然るべき筋と連絡をとるべきであった。

AP通信がシュタインの往復書簡のすべてについて知らなかったことは，教会の世間的な信望にとって大いに害がある。なぜならば，AP通信はこのことを知らなかったために「シュタインは手紙を託したが，1938年の自伝ではその手紙がいったいどうなってしまったのかを心配している。……　歴史家たちもこの手紙がどうなったのかを気にかけていた。というのも，バチカンにユダヤ人を助けるための仲裁を求める多くの訴えがあったが，この手紙が最初のものかもしれないとされているからである。」と報じている。言外には，シュタインは教会がその無関心の眠りから目覚めるよう必死に試みたが，冷淡にあしらわれ，返事をもらえなかったという意味が含まれている。

シュタインの手紙には，返事がなかったという架空の作り話がひとり歩きしてまつわりついている。この出来事について他の新聞は，いっそうひどい仕方で報道している。*The Sydney Morning Herald* 紙（2月19日付）は，「ナチス時代に教皇は学者の申し立てに耳を傾けなかった」という見出しの記事で，「（手紙の）応答としてシュタインさんが受けたのは，教皇からの祝福のみ」であり，この熱意に欠ける反応は，ただ「教会がナチスへの抵抗に失敗したという論争をあおる」だけであろう，と記している。

The Independent 紙（2月21日付）では，露骨にも「シュタインの手紙には返事がなかった」のであり，シュタインは明らかに「教会がナチスの極悪非道に無関心らしいということに，大いに悲嘆していた」と断言している。*The Toronto Sun* 紙（2月23日付）の「沈黙は金にあらず」という見出しの署名記事では，「1938年の自伝において，シュタインは自分の手紙について『何も起こらなかった』と苦々しく回想している」と言及している。

他の無数の記事や見解がこのような誤りを繰り返した結果，反教皇のプロパガンダの風潮がもたらされた。

AP通信が，他の新聞では触れていない次のことに言及したことは称賛に値する。すなわち，シュタインの手紙がヴァルツァーによってバチカンに送付される一週間前に，バチカンが既に迫害されるユダヤ人を援けるための行動を起こしていたことである。「カトリックの時事ニュース機関 *Zenit* によれば，もう一つの文書が浮かび上がった。それは，エウジェニオ・パチェリ――当時，バチカンの国務大臣でのちの教皇ピオ十二世――による1933年4月4日付の手紙で，ドイツのローマ教皇大使（チェザレ・オルセニゴ。彼は実際にはピオ十一世の教皇大使であり，パチェリの教皇大使ではない）に，ドイツにおける反セム的な暴挙に（反対して）介入するように指示している。」

この指示の全文は，極めて重要である。パチェリ枢機卿は，次のように記している。「ユダヤ人の重要人物らが，ドイツにおける反セム的な暴挙の危機に対する介入をお願いしたいと，教皇様にうったえています。聖座の諸伝統のひとつは，全世界の平和，そしてその社会的あるいは宗教的事情に関わりなく，すべての人々に愛を向けるという自らの使命を遂行することでありますので，教皇様は閣下に，献金や，必要であれば慈善機関によるなど，望ましい仕方で関わることが可能かどうか，またどのようにして可能であるかを調べてほしいと願っています。」

この指示は，最近発表された公文書から明らかになったもっとも注目すべき文書のひとつであると同時に，あまりにも知られていない文書のひとつである。この文書については，四十年前，エウジェニオ・パチェリの生涯にわたる助手であったロバート・レイバー神父が，ドイツのイエズス会の定期刊行物 *Stimmen der Zeit* 誌（169号，120頁）に寄せた1937年の反ナチ的な教皇の回勅 *Mit brennender Sorge* に関す

る記事のなかで，言及している。

ただしそのような指示をした文書記録としての証拠が入手不可能であったため，このことに言及したのは，ごく小数の学者やまったく聖座に敵意をもたない人々だけであった。

結局この抗議文書が，後に *Mit brennender Sorge* の公布に至るまでの年月において，聖座がナチス政府に申し出たまさしく最初のものであったことが判明した。こうした外交的な干渉の多く —— すべてではないが —— については，すでに 1965 年と 1969 年に，二巻の書物で公表されている。ドイツの学者ディーター・アルブレヒトの編集によるもので，彼はこれらの書物をドイツ公文書館から再版した。アルブレヒトが入手できなかった諸文書のひとつが，バチカンがユダヤ人を支援したことに関するこの文書であった。

この抗議が聖座の介入のまさしく最初期のものであるという事実は，例の反教皇の論者たちの主張とは逆に，ナチスの反セム主義に対する教皇の関与が最優先事項であったことを明白に示している。

この重要な指示は，それ自体切り離して分析することが相応しいのであるが，教会にとってあまりにも都合よく見えたので，AP 通信は，すぐにそれを過小評価しようとした。ノートルダムのユダヤ思想の教授 —— 彼はその文書を見ていなかったし，いわんやバチカン外交やドイツ史の専門家でもなかった —— の言葉を引き合いに出し，ドイツのカトリック司教団が沈黙を守っていたという理由から，この指示が外交的「経路」のなかで消え去ってしまったことは明白であると推測した。事実，指示はドイツ司教団に対してではなく，ドイツ政府に直接抗議をすることができる立場にあった教皇大使に届けられた。

このように悪く言われるドイツのカトリック司教団に関しては，ナチ政府からの亡命ユダヤ人で最も著名な大家アルバート・アインシュタインが，ナチスの悪事への反対を「口にした」のは司教団の他に皆無であったと明言している。

「ただ教会だけが，真理を抑制するヒトラーの運動方針に対して真正面から向きあって立ちあがりました。わたしはそれまで，教会に何の特別な関心も持っていませんでしたが，今では大いに賞賛の気持ちを抱いています。なぜならば，知的真理と道徳的自由のために立ち上がる勇気と粘り強さを持ち合わせていたのは，唯一，教会だけだったからです。」（*Time* 誌，1940 年 12 月 23 日，40 頁）

アインシュタインの意見は，左派の報道記者であるハワード K. スミス（『ベルリンからの最終列車』）やプロテスタントの学者ゲアハルト・リッター（『ドイツの抵抗』）のような第三帝国の他の目撃者たちによって支持された。AP 通信は，エディット・シュタインの手紙が教皇の回勅を要請したという主張に関する訂正記事において，「手紙のなかで，その要請は明確にはなされていない」と認めた。

2 月 16 日金曜日，バチカンの公文書が発表された翌日，CNN のバチカン解説者ジョン・アレンは，新しく公表された公文書に関する冷静な批評を展開している。「エディット・シュタインという名の人物による有名な手紙がある。彼女はユダヤ人である。カトリックに改宗し，修道女になったが，結局アウシュビッツで亡くなった。彼女は 1933 年の 4 月に，ナチスのユダヤ人迫害についてピオ十一世に訴えるために，この手紙を書いた。現在でも，多くの人々がその手紙のなかに彼女が教皇に回勅を書くことを要請したと信じている。…… 昨日の朝その手紙が公開されるや，われわれは，彼女がそのような要請をまったくしていなかったということを知った。したがってこの手紙は，少なくともこの点では，歴史的な論争を教会の立場に有利な仕方で解決したのである。」

これまでエディット・シュタインをめぐるバチカンへの一般的な非難は，彼女が 1933 年の手紙で教皇の回勅を嘆願したが返事を得られなかったこと，そしてバチカンとドイツの上位聖

職層が，四年後の1937年に *Mit brennender Sorge* が交付されるまで，完全に沈黙していたということであった。

しかし今や，われわれは次のことを知ったのである。

(1)　エディット・シュタインの1933年4月の手紙には，教皇の回勅に関する言及，あるいは要請が，まったく存在しない(手紙の翻訳文を参照せよ)。

(2)　エディット・シュタインは，すみやかに返事を受け取った。実にそれは，パチェリ枢機卿からの返事であった。[8]

(3)　バチカンがその手紙を受け取った当時，ピオ十一世とパチェリの二人は，ナチス・ドイツで迫害されたユダヤ人を援助するために，すでに行動にうつっていた。新たに公開された1933年4月4日付のオルセニゴへの指示に見られたとおりである。したがって，シュタインからの手紙は，彼らを無抵抗から呼び覚ましたのではなく，単に彼らがそれにしたがって行動していた道徳的，宗教的な懸念を確証したにすぎない。

(4)　バチカン・ラジオや *L'Ossavatio Romano* 紙の紙面で，1933年から1937年の聖座の公式見解を検証するものは誰であれ，ナチスと反セム主義，人種差別，極端なナショナリズムに対する多くの非難を見出すであろう。*Mit brennender Sorge* の公布は，長い一連の申し立ての総決算であった。―― それは，他と切り離された声明でも，遅まきの声明でもない。ナチスが権力を掌握する数年前，パチェリ枢機卿がバチカン国務長官になった最初の年である1930年10月11日には，早くも *L'Ossavatio Romano* 紙が，社説で「ヒトラーによる国家社会主義政党は，カトリックの良心と相容れない」と，まさに公然と宣言している。

ナチスに抵抗した著名なオーストリア人でカトリック殉教者のフランツ・ヤゲルシタッターは，そのような諸々の宣言に感化されたのであり，しかも，教会の公告に従った信心深いカトリック信者が，他に数えきれないほど存在したのである。教皇ピオ十二世は第二次世界大戦の終わりに，次のように語った。「当時，国家社会主義運動の真の本質とキリスト教文明にさらした危機を公然と非難せず，糾弾しなかったという理由で，教会を責めることは誰にもできません。」(1945年6月2日，枢機卿会でのあいさつ)

このことがすべて真理であれば，何故エディット・シュタインは，伝えられているように，日記（自伝）のなかで，自分の手紙がどうなったのかを心配する見解を述べたのであろうか？これには様々な答えがある。

(1)　第一に，われわれはエディット・シュタインの文書のすべてを持っていない。なぜなら「彼女のカルメル会の姉妹たちは，エディットの郵便物の多くを破棄するように強いた。彼女の手紙類がナチスに見つかれば，彼女や他のカルメル会シスターたちに害が及ぶかもしれないという恐れを抱いていたのである。」（マリア・ルイズ・スカペランダ『エディット・シュタイン，十字架テレジア・ベネディクタ修道女』Our Sunday Visiter Press，2001年，95頁）

(2)　われわれは，ヴァルツァー大修道院長

[8] この主張に対してスザンヌ・バッツドルフは「私にはドイノ氏が，その（パチェリ枢機卿の手紙の)行間を，実際に含まれている意味よりもずっと多くのことを引き出して読んでいるように思える」とし，「早々に返事を受け取った」という記述に強く抗議している。「ヴァルツァーに届けられた手紙 ―― エディット・シュタインに対しては間接的な伝言しか記されていない ―― が，待ち望んだ嘆願への返答であると決めてかかるような主張はなされるべきではない。彼女の手紙は，深刻な苦しみの中で記され，有意義な回答を心から望んでいたことは明らかであり，第三者へ宛てられた受け取りの通知よりも，当然もっとましな回答を受け取ってしかるべきである。」Susanne M. Batzdorff, *Aunt Edith : Jewish Heritage of a Catholic Saint* (Second edition), Templegate Publishers, 2003, p. 231

――彼自身，ナチスの監視下にあり，文通には慎重になっていたことは疑いえない――が，どのようにしてパチェリの返事をシュタインに伝えたのか，正確にはわからない。彼は，パチェリの手紙の文面を彼女に渡さずに，彼女自身認めていることであるが，ただ「教皇の祝福」として，かいつまんで伝えただけかもしれない。

(3) シュタインの言説は，一連の注釈者たちによって大幅に編集されており，彼らが彼女が記したすべてを間違いなく表現しているとはかぎらない。

(4) 1933年の後半，シュタインは正式に宗教的生活に入り，隠遁の修道女となった。そして彼女は，ナチズムと反セム主義に反対するバチカン・ラジオの声明を聞いたり，あるいは *L'Ossavatio Romano* 紙を読んだりすることが，ほとんどできなくなった。ナチス・ドイツの全体主義体制下では，著しく禁圧された（彼女自身，1933年の手紙で「意見を公にする自由は束縛されている」と述べている）。当然，彼女の知っていることは限られており，それは，友人や，個人的に彼女と連絡しうる信仰上のつてから，たいへんな困難を経て伝えられた断片的な情報であった。彼女自身，1938年の末にドイツを離れ，オランダのカルメル修道会に行くことを余儀なくされたのである。

その後彼女は，ナチズムと反セム主義を激しく非難したオランダ司教団の教書――これはまさしく，彼女が教会に要請していたことであった――の報復として，1942年に逮捕され，アウシュビッツで処刑された。

何はさておき，エディット・シュタインが1933年の手紙のなかで，自分がカトリック信者であるという事実を，二度喜んでとりあげていることを見過ごすことができない。「ユダヤの民の子どもとして，神の恵みにより，十一年前からはカトリック教会の子どもとしても」という箇所と，「教会の信仰をもった子どもであるわたしたちは皆」という箇所である。――「ドイツにおける，そして思うに，世界中の信心深いカトリック信者」という言及も同様である。彼女は明らかに，教会を不動の岩として，また霊的な栄養として見ているのであり，今どきの論客たちが思っているような老いぼれた保守的な機関として見ているのではない。

彼女の手紙は，激しく憎み憤っているカトリック信者の苦しみではなく，敬虔なカトリック信者の心からの証言である。同時に，教会の能力と責任への熱心な勧告でもある。これまで見てきたように，教会は間違いなく彼女を裏切らず，問題を分かち合って援助した。結局のところ教会は，彼女にとって力強い最後の頼り手となり，彼女はアウシュビッツで地獄の門を通り抜け，聖人として天国に姿を現す結果となったのである。

【付記】 本稿は，日本学術振興会から交付された平成20年度科学研究費補助金基盤研究（C）「エディット・シュタインの公開手紙をめぐる論争に関する調査と文献研究」（課題番号：19520061）による研究成果の一部である。